



げたばき物語

半村 良

講談社

(2/20刊・¥980)

七三年から八〇年までの七年間のエッセイ、対談などを収めている。デビュー間もない（処女長篇『石の血脈』が七一年のこと）ころ、『産霊山秘録』（七三年）が出た当時から、『三村時代』の一角を成すまで、相当長期にわたったの文章が、まとめられているわけだ。あまりエッセイは書きたくない、という著者だけあって、量は多くない。

まず、自叙伝的戯文として、小説を書きはじめるといった経緯が書かれている。誰の人生でも、みんなどこか違って見えるはずだが、さまざまな職業を経ってきた、著者の軽妙な語り口からは、それだけの苦労や経験が読み取れるようだ。小説を読むことと、その著者のプロフィールを知ることとは、本来あまり関係がないと思う。しかし、一方で伝奇小説を、一方で下町の人間関係を描くという、この空想と現実の間を、有機的につなぐものは、やはり著者自身にある。もっとも現実的な生活の中で、もっとも空想的な世界が広がっていく様が、いろいろなエピソードにあらわれているようだ。

他、『妖星伝』についてや、五木寛之、小松左京、尾崎秀樹ら六人との対談を収める。（後）